

仏教思想における注釈書についての一考

— 『大毘婆沙論』を中心に —

研究員 石田 一裕

本講座において、私は『阿毘達磨大毘婆沙論』を具体例として、仏教における注釈書のあり方についての見解を述べた。『大毘婆沙論』は『発智論』の注釈であり、また論蔵として最大の分量の典籍である。また『発智論』の一文一文を引用し、それに語注を加えるスタイルは仏典の注釈形式の一つであるが、説一切有部の論蔵のなかではそれまでの、いわゆる「六足発智論」には見られないものであり、このような注釈形式をとった初期のアピダルマテキストと考えることが出来る。

『大毘婆沙論』が『発智論』を注釈する態度は、全部文を同等に扱い注釈するのではなく、ある一文には多量の注釈を施し、他の部分には少量の注釈を与えるなど、『大毘婆沙論』編纂者の関心に従って注釈が行われている。また時には『発智論』の議論から大きく外れ、『大毘婆沙論』独自の教説を披瀝することもある。

『大毘婆沙論』における『発智論』の注釈は、『発智論』本文が紹介された後に「なぜこのような論をなすのか（何故作此論）」と問い、それに対していくつかの回答を与える。そのうちの一つに「他の宗を止めて、自身の意図を明らかにするため（爲止他宗顯己義故）」というものがあり、

これは『大毘婆沙論』が独善的などと評される一因となっている。しかしながら『大毘婆沙論』は単に独善的ののではなく、時に様々な見解を紹介し、それに検討を加えることで自身の学説を意義づけるなど、あくまでも議論によって学説の正否を定めようとしている点は、決して見逃してはならない。

また議論のなかにおいて三蔵を典拠としたものがあるが、そのような議論において、『大毘婆沙論』の編纂者たちが、彼らの伝授している「六足発智論」に誤りがあることを自覚していることを理解することが出来る場合がある。彼らは伝授される「六足発智論」に誤りがあり、それを誰かに指摘された場合、「まさにそのように読誦すべきである（應作此誦）」と述べて、相手の指摘の正しさを認めつつ、「しかしながら、そう読誦しないのは別の意図がある（而不爾者有別意趣）」と述べ、解釈によって自らが伝授するところのテキストの正当性を主張する。これは彼らがテキスト伝授の伝統を非常に重んじていた事を示すものといえよう。

『大毘婆沙論』は膨大な分量を有するため様々な角度からの研究が必要であるが、研究の前提を『大毘婆沙論』を独善的な有部の典籍としてはならない。『大毘婆沙論』には、その編纂者たちの様々な思惑が込められており、それに目を向けつつ本文を吟味して考察を進めていく必要があるであろう。